

の余地はありません。

ただ、恒久的な住処となる復興住宅をどうつくって（供給して）いくのかという取り組みは、応急仮設住宅とは全く異なる課題を有するものであり、地域福祉・医療や産業再生、地域防災、コミュニティづくりなどの長期的視点に立たなければならない非常に難しい取り組みであると言えます。

また、応急仮設住宅でやっと形成されたコミュニティが、高台移転等で全く違う地域につくられた復興住宅において、

- ・そのまま住民のメンバーも含めて維持されるのか？
- ・応急仮設住宅の住民がそれぞれ違う地域に入居となり再度つくり直しなのか？
- ・さらには、「災害救助法」に定められた応急仮設住宅への居住期間（原則2年間、ただし1年間の延長有）に対して上記の取り組みが間に合うのか？
- ・5年間帰宅不可とされた地域の住民は応急仮設住宅の入居期間終了後の2年間はどうするのか？

などソフト面も含めて、二次的・複合的な課題が山積している状況が伺えました。



現在の津谷川付近の様子

②「何を守るのか」（見学会にて）

3日目の被災地視察（岩手コース）に参加しました。その中で、気仙沼の小泉小学校で津谷川付近での津波被害の状況を知り、考えさせられました。

この地域は、海岸からだけでなく河口域から遡上した津波により河川周辺部が多大な被害を受けており、それに対して、今後高台への集団移転に加えて、海岸沿いの防潮堤や河川の両岸にも防潮堤を構築する案を計画中であるというお話をでした。

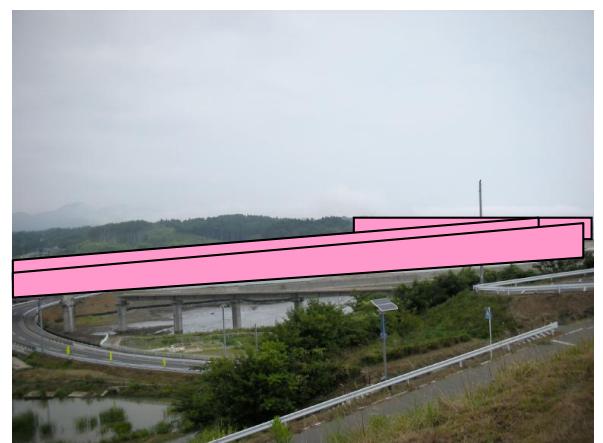
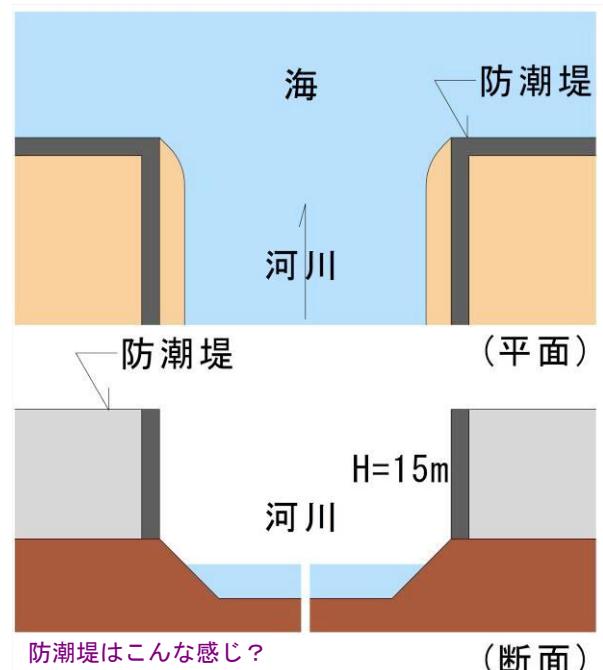
とりわけ防潮堤の高さは、今回の津波の高さを勘案して15mを想定しているとのことでしたが、これを建設した後、埠で囲まれ、海や川なども見えなくなり、まちの風景はどうなるのか？

また、この防波堤を建設するのに膨大な工事費用が必要なのではないのか？

多くの尊い人命が失われたことから学んだ教訓を踏まえながら、「何を守るべきか？」の視点に立脚し、どこに重点を置いて防災・減災を進めていくかで、まちづくりの方向性が大きく違ってくるはずです。

このことについて、視察参加者の多くが現場で意見を交換していました

多くの課題に対して、どう折り合いをつけ、どう着地するのか、大変難しいまちづくりになると感じました。



防潮堤はこんな感じ？(識別のため着色)